

最教寺にあり。是他國侵逼の難を防ぎたまひし。本朝万年守護の御本尊と稱し奉る者り。是れ依鎌倉の檀越より。御經に利益とせめて天下にうくれなきよしを祝し。布施を獻じ喜を演もの多うりける。九月二日波木井六郎實長。今年六十の賀を祝とて大士を其邸宅に請待し奉り。一門擧て賑ひ喜ひ。實長今日より家督を嫡男彌六郎長義にゆずり。誓を切て入道。法寂日圓と名づく大士自ら我小像を彫で。波木井殿に授け。年頃の恩を謝して。八日の朝暁を告て身延山よかへり給ふ。此頃にいたりて。法運大ひお開け山また山の嶮しかる身延の澤に高祖を訪奉るもの。絶間なく日々の參詣貴賤男女星と列あり雲と布御座室の成席諸人房並んで錐を立る坐もほらざりなれば。是非なく地を垣し石を居新に六丈四方の堂をいとさみ。初て身延山久遠寺と稱し。十一月廿四日をもつて。開堂の供養を行れけるよぞ。遠近の參詣群集をぞ成しうりける。かくて高祖大士常々富木殿の舊恩を忘給はず。常忍の像を手自御彫刻ありて。側に安置し朝夕は尊敬を加へたまふ。常忍もこれを見て。いと勿射き事よおもひ。みすうら大士

の尊像を死さみ。平日禮拜怠り給とせ。これを互交の尊像とて。今猶現存せりとぞ。法門無盡かざりあり。衆生教化にいとまさし。往を送り來を迎へ。春去夏も夕顔の花もしやとて宵々の袂涼しき文中旬。高祖の御身に病を發し。御氣色に常に替らせ給とねせも。御食事もや減じ。起居何とさく。御容跡輕からせ見ゆるよぞ。四條北企をとせめとして。これを聞て退々よ登山し。御動靜を訪奉るに。高祖大士思召とやありけん。池上宗仲の宅よ入て。養生をせむやと仰有けるに。遠路の山河いらいわらんと。皆々案じませらひけきども。折角の御意に背くも恐れ多しとて。其要意取々よわりなるが。波木井入道。次男彦次郎實繼を御伴にさしそへ。かねて愛し給ふ逃物の良馬も。おん望みにまうせそれおて送り奉る。法子檀方多く附添まらせ。九月の八日齋食を召て。程なく身延山を御出立その夜の。下山兵庫が宅にやとり給ひ。九日の皷澤ある大井莊司のもどよ御止宿。十日に曾根の次郎が方に宿し。十一日黒駒。十二日河口の梅屋上房に止宿。十三日奥地の遠山藤澤がもどにおん入。十四日駿州竹のし。鈴木繁八に止宿。十五

日相州關本下田五郎左衛門。これみきもどより歸依のかさぐさされば。御意のうちに
 にの承き別れをお祈りしめし。みこころよく其供養を受給ひ。十六日平塚長谷川氏おや
 せり給ふ。其跡松雲山要法寺といふ。十七日瀬谷の妙光寺に入らせ給ふ。住持文教阿闍梨
 宗旨を改めて。法弟となる。名を日成と賜ふ。十八日午の時池上に着給ひ。十九日御書を
 御きたりめありて。難處多かる此程の旅路。彦次郎實繼厚く介保なし給ひ。馬も亦よく
 我が意にうきへり。彼是御心ずくしの御恩。生れ忘れがたし。我病愈はめでたく面會す
 べし。まうし老病ころもどなし。こゝへ我何處にて死すとべるども。墓をば身延山に
 建てせ給へらしと書て。彦次郎の歸る便宜お波木井入道お送りたまひけり。廿三日大
 曼陀羅を書て。主翁宗仲に與へ給ふに。宗仲つゝしんで。おれを受けて言やう。去る建治元
 年我が邸のうちよ。本門寺を建立おしたれども。いまご開堂の供養を遂す。聖人御全快
 の上り。一會の御法要を願ひ奉るとありければ。大士も今般の病氣。もとや定業にし
 て愈べしとも覺へず。僥倖けふり食もす。み。いと心も晴やかなる。いと仰ありて。洪鐘

を鳴し法鼓を擡てありければ。此程大士の病ひを訪て。こゝに聚る僧俗男女。その大堂
 よ居並んで。整と見へにける。大士強て起出給ひ。沐浴盥漱。御履を召て。堂に上り。誦
 經唱題なし給へば。大衆も同音に和し奉る。夫より高座に登り。立正安國論を講釋お
 し給ふ。一會の佛事式法の如く行これ。皆く宗運万歳を唱へけり。かくて大士の疾病い
 よくおもらせ給へども。御病床にいまして。法門を談じ。いさゝく側にかたせ給と
 せ。側らをかへりみて。我が死するるときに。大地震動すべし。左もあぐ。我の死なじ各
 心を勞し。まふおどありて。十月三日。日朝を召て。立像の釋尊。立正安國論。御免狀。二
 通御紀念おまゐらすよし仰有て。又。日昭。日朝。日興。日向。日頂。日持の六人を。六老僧とさ
 だめ。我々入滅の後。この六人を我が如くに仰ぎ事へよ。ま。我が遺骨。身延山に納
 めて。六老師輪番にこれを守護すべしと。左右を召てこれを仰選したまひ。又御法子檀
 方へ。御遺物を頒け與へたまこととて。日興師に筆と。とらせて。一々。是を記させ給ふ
 これ彼と冬の日影の移り易く。けふしも十一日。諸師檀越一寸の間をも惜んで。御側さ

らすありけるが高祖大士の經一宮一經一と御病床ちかくめしよせられおもさ御枕
を搦げ右の御手をさし伸てその頂髪を三度まで搦撫給ひ鳥の將に死ぬる時その嗚
聲悲し人の將に死なん時そのいふ言よしといへり汝今年十四歳つしんで我が還
命を承諾き我建長五年夏の頃とじて本地難思の妙法を弘通し日本國の一切衆生
を救ひ得させんとの誓願も今すでに満足すといへども我一期の間鎌倉殿小御言三
度におよび伊豆に三年佐渡に四年仕處を連れしよと二十餘度そのうへ安房上総下
總武藏諸國の教化よ年命たらし唯今入滅なすにつけ心残るの京都の弘通いまご此
御題目二天の君の御耳に觸奉らせ汝これより日期を師と頼み學問修行成就せば
華洛よ登りかあらせ本化の妙法を天賜ふ達しくれよのしと懇なる御遺戒に經一
磨の御手にすがと一聲よと泣しつみ畏み侍す詞さへおみだに曇る朝時雨袖ほし
あへぬ日期日向左右より御介保まゝるをためて夜晝と御側にある僧俗男女御題目
を唱へつゝ送る日脚も短くてげふ十三日の朝卯の時頃一搖ゆるく地震のいひまに

各御病床に馳聚りけるよ高祖大士の安然として一座にまめし宣ふやう今後五百
歳の時を得て宗運ひらく法の華一乘妙法蓮華經といふり大聖世尊五百座點劫の間
本因本果の妙行にして我等衆生一念信力のうちに其功德を讓受るこれを即身成佛
といふもし信心弱くまで我々教へに違ひまへこれまで永く六道の苦難にも懲す又
惡道に沈みやせん其時日蓮を恨み給ふあと御聲まづのに御教導ありて御側に命て
のねて御染筆の曼陀羅を掛させ給ふ後世お臨滅度時の御本尊と稱し奉るのこそ
あり斯て幽微さ御聲に毒量品を誦み給ふにぞ大衆も一同に静々と御經を誦澄し奉
る御香爐の煙たねぐに薫じわたり御次の間の漏刻般としていひさ此辰の牌に
やどおがゆる頃慈顏御笑を合給ひ寶胎眠が如く大涅槃に入給ふ時小壽算六十一歳
壬午よ生れて壬午よのくれさせ給ひけりかくて日昭聖人南無妙法蓮華經と唱
へ揚たまへバ僧尼俗子のわいだめなく御題目を唱へ奉り地を走る獸林に群がる禽
も五十二類の愛別を嗚鳴このとき池上の滿山諸木よ花發いて法性の春を表すこれ



五ノ六十七



五ノ六十八

我が宗門御會式に花を挿由來のこゝに始りける。十四日戌の刻寶棺に収め奉り、その夜子の上刻御出棺御葬式の順列の朗慶御華皿をさげ、次郎三郎大續火を擧赤白二本の大蓮華の。上野殿に四郎次郎。又赤白二流れの御旗の。池上右衛門大夫中田左衛門尉御香爐の。富木入道鏡鉢の。太田左衛門入道。花瓶の。南條時光。御文札の。富士四郎太郎御隨身の。法華經の。四條賴基御隨身佛の。比企能本御香の。源内三郎。是より左の方の。日位日忍日持。右の。日保日實日法。これより御寶棺御前の。日昭御後の。日朝御興脇の。日高日興。日合日秀。日祐御天蓋の。太田三郎明持御太刀の。兵衛志。御腹巻の。椎池四郎御馬の。熊王四郎これを牽行列徐のにして。結界四門の西より入て。東門より出て南門に入る。三巡四邊式法の如く。それより寶棺を茶毘所に安し。火を擧て梅檀の薪よりつす。此夜月あきらかに。星はらめは。沙羅雙林のむかしも。こゝに思ひ出られ。十六日御眞骨を拾探て。寶瓶を収め。檀上にお安置して。初七日の御法會まで。法のおとく修行ありける。彼の大聖釋尊の。靈鷲山の良位跋提河の。薄純陀が家に入滅なし給ひ

此日蓮大士の身延山の良位は當り。多摩河の邊。宗仲が宅は滅度せし給ふ。古今よりぬ大涅槃とぞおもこをける。斯て廿一日の朝。法弟檀越一同の御伴にて。御眞骨池上を御出立ありて。身延おももしま給ふ。其夜の相州飯田は。御止宿廿二日竹の下。廿三日駿州車返。廿四日上野南條氏。廿五日身延山に御着ありければ。波木井入道父子喪服を着して御出迎に及ばれ。廿六日に二七日の御法會執行あり。甲駿二ヶ國の檀越信者衆のごとくに群て拜み奉り。十二月二日。御中陰の佛事ありて。在家の男女皆涙あかふに山を下る。六老僧の御廟所の邊近く各庵室を構たもふ。日昭聖人の不願院今の南の坊。日朝聖人の正法院。いまの竹の坊。日興聖人の常在院。今の琳藏坊。日向聖人安立院。今に廻澤坊。日頂聖人の本國院。今の山本坊。日持聖人の本應院。今の鐘の坊。こをなり父四條賴基の今年家督をすて、其身の主君に暇を請。身延の山内に端場坊をいとまんで茲に籠り。これより生涯山を山すして。此坊舎に終られける。明色弘安六年癸未正月廿三日。百箇日の喪終て。各相議して輪番をさだむ。正月日昭。二月日朝。三月日傳。日

賢。四月日頂。五月日持。六月日弁。忍。七月日合。伊賀。八月日法。日位。九月日興。十月日實。日保。十一月日向。十二月日秀。日家と相ざるして。此月まつ日昭。聖人。御番をことめ給ひたる今年十月。池上。一。周忌をいとぎとて。高祖在世のとき。御書を賜りし者。其御真跡を持参して。目錄に入。べきよし。諸國の檀越に觸渡し。各持聚りて。これを記す。御書百四十八通。四十卷として。錄内といふ。又此時に漏るる御書猶多しとて。三回忌御法會のとき。まゝ池上。聚集ところ。御書二百五十九通。二十五卷として。こを錄外といふ。ゆゑせて六十五卷。御書四百七通。こを御妙判と稱して。世に傳ふ。嗚呼。大ひあるる。本化の智徳。其法いよく。實なるがゆゑ。其位いよく。卑く。身。日本國東海。磯村。海郎の子と生れ。佛勅。任て。唯一乘の妙法を。一。閻浮提。お輝りせ給ふ。高祖の前に高祖なく。高祖の後。高祖なし。實に。一天四海佛門の棟梁。衆生救護の大導師なり。大士在世のとき。左右に。詔て。宣。やう。我。こ。富樓那。が辯を。振ひ。目連。が通力を。現すとも。其言。こ。の。當ら。ま。その。餘。なるべし。今言。ふ。く。事。の後。は。合。べ。こ。世。の。人。我。を。信

まへし。文應元年の立。正安國論。よ。勘へ。る。三災七難も。み。あ。一。符合し。り。され。ば。身。下。賤。生。れた。と。人。罵。り。惡。む。と。持。つ。處。の。尊。き。法。華。經。あ。れ。ば。終。お。弘。ま。る。べし。此御經の世に弘まるなら。賤し。我が身も。還て。辱。り。る。べし。ま。の。ま。後。年。小。及。び。我。の。屍。も。利益。あり。て。人。の。渴。仰。せ。んと。今。の。鶴。が。岡。に。鎮。座。ある。八。幡。大。菩。薩。の。如。く。なる。べし。と。仰。殘。され。し。錄。内。十四。卷。の。金。言。虛。から。ず。大。士。の。十三。回。の。忌。辰。に。當。經。一。磨。廿。六。歳。今。ハ。龍。華。院。日。像。と。名。乘。高。祖。の。遺。命。を。頭。上。に。い。さ。した。永。仁。二年。四月。廿。八。日。京都。に。登。り。禁。裏。日。の。御。門。よ。たち。て。朝。日。に。向。ひ。初。て。御。題目。を。唱。と。じ。め。説。法。弘。通。四。十年。の。後。御。弟子。大。覺。大。僧。正。妙。實。の。後。を。繼。給。ひ。時。に。文。和。元。年。六月。廿。五。日。人。皇。九。十九。代。後。光。嚴。帝。御。愛。輪。を。築。せ。給。ひ。日。蓮。大。菩。薩。と。勅。號。あり。て。僧。正。妙。實。に。下。賜。り。たる。ま。れ。高。祖。大。士。滅。後。七。十。一。年。に。相。當。る。我。が。屍。も。今。の。八。幡。大。菩。薩。とい。は。る。や。う。に。崇。め。ら。る。べし。と。仰。殘。され。し。ま。と。茲。に。符。節。を。合。せ。たる。ハ。誠。本。化。上。行。の。御。再。身。兼。知。未。萌。の。大。智。識。と。こ。思。合。され。ける。御。靈。廟。ハ。舊。身。延。御。世。室。の。地。に。して。八。面。の。御。堂。の。うち。に。

御石碑あり。銘曰昭聖人の御筆あり。又御眞骨堂に水晶八角の玉の瓶四方の四大天王の後藤所乘の彫りして七寶の瓔珞珊瑚の天蓋を莊嚴し御眞骨の鮮明にそのうちに拜れたまふ

何ゆゑに碎きし骨の名残ぞとおもへば袖に玉ぞ散ける

と元政聖人の詠給ひしも殊に尊とくあるとれける。當山の十一代行覺院日朝大聖人伽藍を今の地に移し二十三間の祖師堂を造立し山門仁王門五重三重二重の大塔本堂位牌堂經藏鐘樓また通本橋と渡り唐門を入千疊敷の大方丈大書院三十六棟龕をならべ御眞骨堂古佛堂三箇所の御寶藏その外諸堂の廣大舉るにいとままし塔中の寶舎二百七十坊別み西谷椋林を構へり常山に結構す斯のごとし諸州の本山國々の本寺あてせてあれをいとむその數量知るべからず今大士の滅後五百有餘年日本一州法華の寺院〇〇〇の餘におよぶまことに本化六萬恒河の砂は算限りまられぬ宗門の繁榮の末法萬年動のまほ皇國の柱石といまられり

撰者曰祖書録内録外結集の事別に評論あれども此書の唯古來の傳説を折衷し御一代の編作を旨とするなれば結集の一事の世間普通の説に任すのみ讀者遺憾と爲と勿れ

日蓮大士眞實傳卷之五終 大尾

明治十七年九月廿四日出版御届
同年十月 刻成發賣



原版主

日蓮宗大教院

東京府平民

翻刻出版人 免昌堂 名 鹽 貞

日本橋區南茅場町廿四番地

發兌人

東京府平民

扇田 豐次郎

日本橋區大傳馬町
二丁目三十二番地

佐賀縣士族

依托販賣所

副 島 宥 次

深川區佐賀町二丁目廿番地

同 上田	同 松本	同 小諸	同 相小	同 小相	同 田山	同 井中	同 依田	同 矢嶋	同 山下	同 美濃	同 藤守	同 藤守	同 藤守	同 岩村	同 飯田	同 後葛	同 長岡
田中彌兵衛	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門	岩屋武衛門
同 上田	同 松本	同 小諸	同 相小	同 小相	同 田山	同 井中	同 依田	同 矢嶋	同 山下	同 美濃	同 藤守	同 藤守	同 藤守	同 岩村	同 飯田	同 後葛	同 長岡
中野村	三條屋	十一屋	中澤儀兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛	藤守平兵衛
同 上田	同 松本	同 小諸	同 相小	同 小相	同 田山	同 井中	同 依田	同 矢嶋	同 山下	同 美濃	同 藤守	同 藤守	同 藤守	同 岩村	同 飯田	同 後葛	同 長岡
同 上田	同 松本	同 小諸	同 相小	同 小相	同 田山	同 井中	同 依田	同 矢嶋	同 山下	同 美濃	同 藤守	同 藤守	同 藤守	同 岩村	同 飯田	同 後葛	同 長岡

五ノ 七十八

同 山田	同 佐野	同 水戸	同 下館	同 龍崎	同 下島	同 太田	同 鹽田	同 川越	同 浦和	同 浦和	同 川越	同 深谷	同 本庄	同 行田	同 岩槻
野村卓爾	堀越三郎	川口次郎	須藤支助	須藤支助	須藤支助	須藤支助	須藤支助	須藤支助	須藤支助	須藤支助	須藤支助	須藤支助	須藤支助	須藤支助	須藤支助
同 山田	同 佐野	同 水戸	同 下館	同 龍崎	同 下島	同 太田	同 鹽田	同 川越	同 浦和	同 浦和	同 川越	同 深谷	同 本庄	同 行田	同 岩槻
同 山田	同 佐野	同 水戸	同 下館	同 龍崎	同 下島	同 太田	同 鹽田	同 川越	同 浦和	同 浦和	同 川越	同 深谷	同 本庄	同 行田	同 岩槻
同 山田	同 佐野	同 水戸	同 下館	同 龍崎	同 下島	同 太田	同 鹽田	同 川越	同 浦和	同 浦和	同 川越	同 深谷	同 本庄	同 行田	同 岩槻

五ノ 七十七

編馬杉 續日本外史	增補 賴又次郎 增補日本外史	同著 日 日本政記	著 賴久太郎 日本政記	同標註 標註日本外史	同增補 增補日本外史	增補 賴又次郎 增補日本外史	同著 日 日本外史	著 賴久太郎 日本外史
古語拾遺一冊	後藤點五經十二冊	萬通節用集同	廣益正篇字玉 銅鑄	鈴木重選 頭日本史零	同 標註八大家讀本 半紙	雲谷任齋 標註八大家讀本 本中	賴久太郎 正校通議	大岡讓 日本外史評論

同陸中 大町	同同 小盛岡	同同 石卷	同同 通谷	同同 陸前浦谷	同同 同角立町	同同 同角間川	同同 羽後秋田	同同 同米澤	同同 同十日町	同同 同谷池	同同 同上ノ山	同同 同七日町	同同 同市村	同同 同羽前山形
大澤田 兵衛	佐々木 正藏	小野寺 貞兵衛	三陸屋 利兵衛	平塚 次郎	久遠 八右衛門	渡邊 松十郎	荒川 半治	岡田 金三郎	本間 孫三郎	佐伯 權兵衛	須村 久平	中川 嘉左衛門	田宮 嘉五郎	同同 同同
同越前 福井	同同 同高岡	同同 同中富山	同同 同加賀	同同 同博多	同同 同筑前	同同 同豐前	同同 同豐後	同同 同八戸	同同 同青森	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同
森下 源次郎	酒井 兵衛	森川 左衛門	鹽屋 卯介	上野 甚吾	大田 藏堂	具野 新平	知野 樂支	五野 樂支	山崎 樂支	林部 依三郎	安野 依三郎	山崎 依三郎	浦山 依三郎	同同 同同
同函館 通	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同	同同 同同
常野 文嘉	魁山 靜左衛門	富木 幸兵衛	青田 平二	吉司 進八	赤司 儀八	明田 儀八	長山 儀八	中山 儀八	山崎 儀八	鶴野 儀八	熊本 儀八	河內 儀八	岡本 儀八	同同 同同
平社	吉門	衛衛	郎郎	社社	郎郎	衛衛	郎郎	市市	藏藏	造造	助助	吉吉	助助	社社



賴氏謝撰拾遺三冊

女四書四冊

商業書二冊

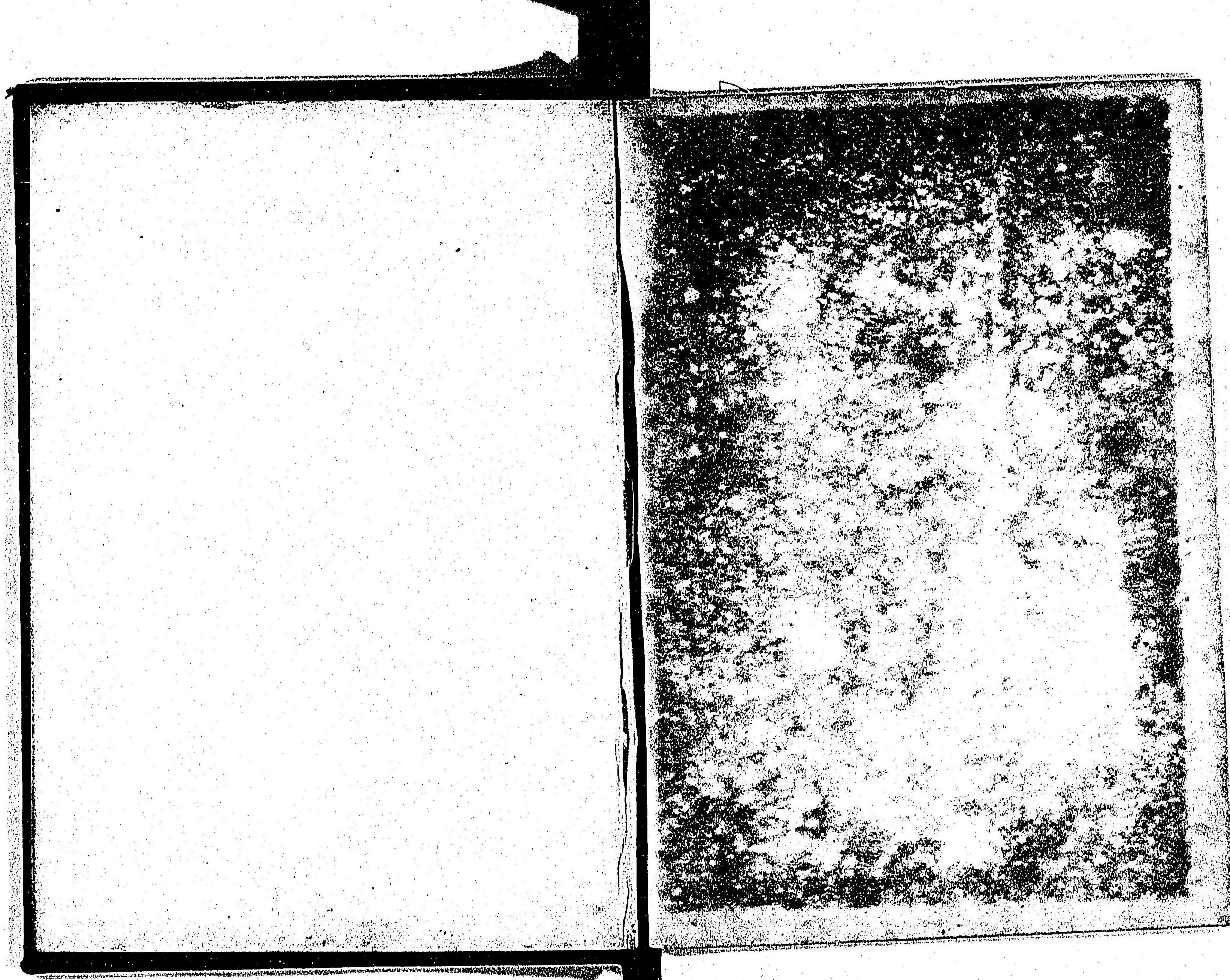
農業書一冊

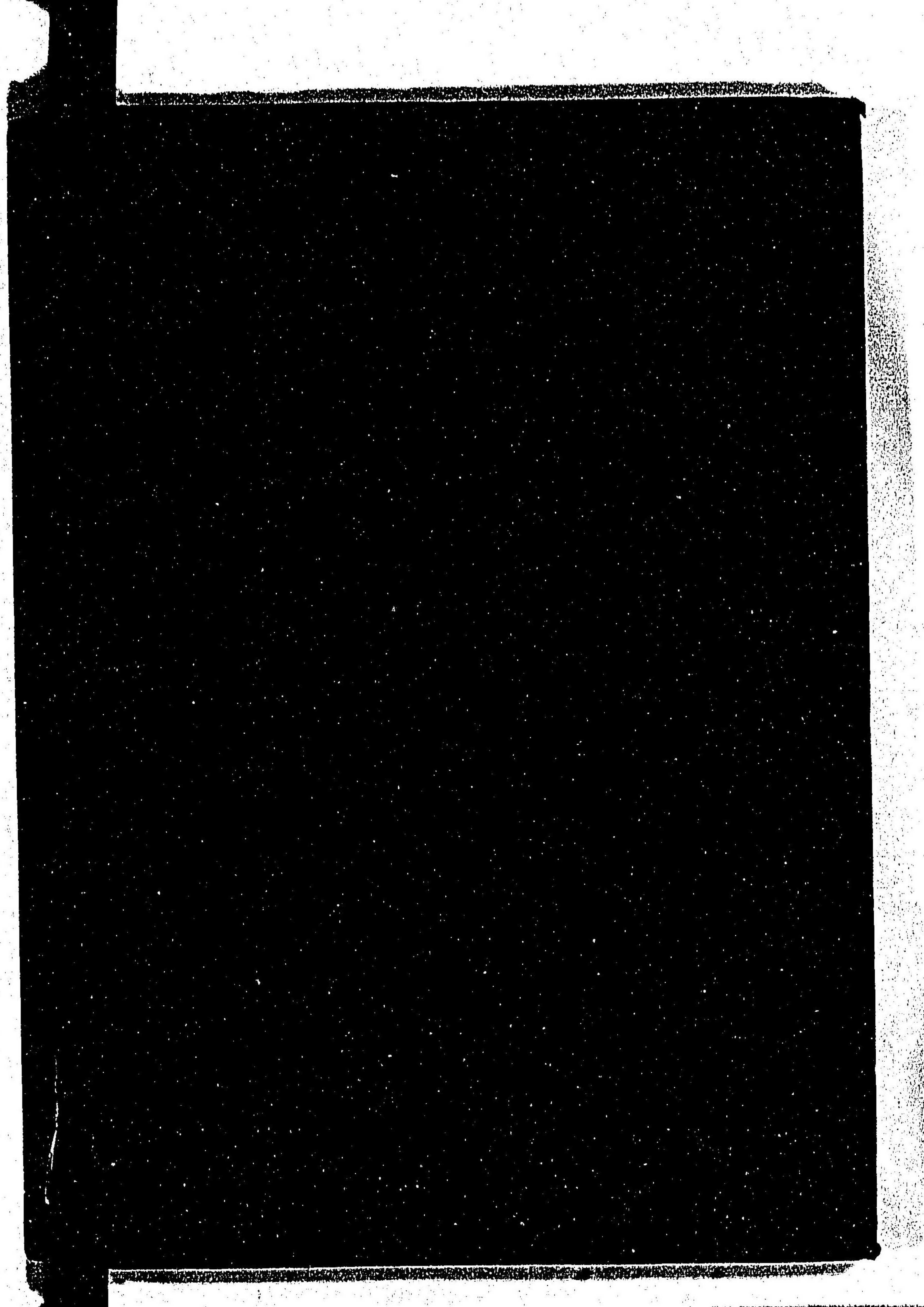
小子作文書三冊

裁法教書六冊

易田豐次郎編輯
萬家雅名
肖像
音曲之部
集一冊
近刻

大正
六年
六月
八日
發行
東京
大塚
書局
發行





020074-000-9

特10-943

日蓮大士真実伝

小川 泰堂/編

M17. 10

ABH-0276



